



贗作幽霊劇場

tontokaimo39

賈作幽靈劇場

「私が、美弥子を殺した……そう、美弥子は私が殺したのだ……私を母の様に慕っていた美弥子を……私は、娘のように思っていた美弥子を……」

「ねえ喬一、この週刊誌の記事、どう思う？」

「ロシアンルーレットか、後味の悪い事件だが誤って毒物を飲んだのだからまあ事故だろう」

「夕子先輩、私そのお二人知ってるのです」

「えっ、直子の知人？」

「はい、それ程親しい方ではないのですが三度ほどお会いしたことがあるのです」

「どう言うこと？」

「最初にお会いしたのは、父とあるパーティーに出た時です」

「花屋さんでしょう、直子のお父さんが出るパーティーに？」

「お花屋さんですが、山畑さんと言う方と一緒にでした、山畑さんは建築関係のお仕事だそうです」

「なるほどパトロンがいるのか、で亡くなった若い子は？」

「刈谷さんですね、お花屋の深沢さんに『山畑さんと二人だけで出るのは嫌だから』と言って誘われたのだそうです、私と同じ世代の参加者は刈谷さんだけだったのでパーティーの間、ずっと二人でお話してしまいました」

「で、その深沢と刈谷はどういう関係なんだ？」

「それはよく知らないのです、ただ刈谷さんはお花屋の手伝いをしてるようです、後二回お会いしたのは、私がお花を買いに行ったからです」

「ふーん、そうだったの」

「あつ、その週刊誌にも載っているのですが、深沢さん、刈谷さんを殺したのは私だと言ってすぐ自殺されました」

「結局二人とも死んだのね」

「いや、深沢さんは助かって今入院されています、手首を切ったのだそうですが」

「直子よく知ってるのね」

「父から聞いたのです、山畑さんが父の会社に入入りしているのだそうです」

「私にも本当の娘がいる、美弥子と同じ年だ、出産と同じ時に私は倒れた、夫が他界した直後だった、到底育てることはできなかった、私は理香を手放した、そして私は、生きていく価値を見失った、あの日からもう二十年、花屋を始めた私は、殺虫のために使う農薬を手に入れた、そして馬鹿な計画をたてた、そう、自殺の計画だ、うつ気味の私に医師が薦めてくれた精神安定剤のカプセルの一つに、その毒を仕込んだのだ、気分の優れない日には、カプセルの一つを飲んでベットに入った、毒入りに当たれば、ベットのなかで死ぬるはずだった…」

でも、美弥子ができるようになってからは、生きていることが楽しくなった、私は馬鹿な賭けを止めた、それなのに……」

「私、お見舞いに行こうと思うのです、夕子先輩、一緒に緒していただけませんか？」

「え、どうして？」

「ごめんなさい、お見舞いに行っても、私どうお話しているのか分からないのです」

「何いつてるの直子らしくない、まって……そうね、行ってもいいわ」

「本当ですか、ありがとうございます」

「あつ、直子さん、とんだ心配をかけてしまつて……」

「早くお元気になって、綺麗なお花を売ってください、そうすれば美弥子さんも喜ぶと思います」

「そうね：ありがとう、あの、そちらの方は？」

「学校の先輩です、永井夕子さん、いつもお世話になってる先輩なのですが、今日は二人一緒の行動だったので」

「はじめまして、永井夕子です」

「そうですか、わざわざありがとうございます」

「直子の言うとおりですわ、お元気になられることが何よりも大切：そうでないと、亡くなられた美弥子さん、決して喜ばないと思います」

「お二人とも、本当にありがとう、私が馬鹿なことをしたばかりに：」

「新聞で少しは読みました、でもどうして？」

「美弥子さん、なぜ間違ったのでしょうか：」

「そう：聞いていただけける？私が馬鹿なことをしてたのは新聞でご存知ね、私にも美弥子と同じ歳の娘がいるはずなの、はずというのは、夫の他界と同時に私も倒れてしまったの、だから娘は他人に渡した、夫は、理香という名前

を付けてたのだけど…それから私は生きているのが嫌になつて…

美弥子ね、時々非常に緊張することがあったの、だから私が使っている薬を薦めてみたの、もちろん私が農薬を混ぜたものとは別のもの、あれを早く処分しておけば…美弥子、気分が楽になると喜んでいたのに…

あの日、美弥子が亡くなった日ね、配達から帰ってふとメモ代わりに使っている黒板を見たの、もっと早く見ればよかったのにコーヒーを入れてくつろいだ後よ、すると『だまって持ち出してごめんなさい、お薬一個いただきました』と書いてあったの、えっ！どこから！ハツとして毒入りが混ぜてあるビンを見ると明らかに動いていたの、すぐ携帯をかけたのだけど間に合わなかった…

ピンは他のいらぬ薬といっしょに始末しようと薬棚の奥に置いていたの、農薬入りを除けば彼女に薦めたものと同じものだし、彼女は私が自殺に使おうとしていたなん

て知らなかったものだから…、あの日は男性に会うと言っ
てたから、きつと緊張を解そうと…」

「先輩、どうしてそんなに難しいお顔をなさってるので
すか？確かに楽しいお話を聞いたのでは無いのですけど」

「直子と一緒にお見舞いに行くこと決めた後ね、喬一に頼ん
で事件を担当した人から少し聞いてもらったの」

「事故だったのでしょうか？」

「事故だけど、普通の事故とは少し違うわ、あの花屋さん
ロシアンルーレットを仕掛けてたんだから」

「じゃあ罪になるのですか？」

「本当はね、でも被害者に対しての殺意があったわけでは
ないので、薬品の扱いに対する嚴重注意ぐらいで起訴はし
なくても、と言うことになったのだそうよ」

「じゃあ、よかったじゃありませんか」

「そう、でもね、美弥子という子のポケットにはカプセル

が一個残ってた」

「えっ！」

「変でしょう、深谷さん確か黒板に『お薬一個いただきました』と書いてあったと…」

「警察で担当した方、気づかなかったのでしょうか？」

「黒板のことは、私たちに話したのが最初だと思う、深沢さん手首を切ったのでしよう、詳しく話せる状態ではないし、警察も聞けなかった、だから特に不審なこともないので事故としてさっさと処理してしまったのじゃないかしら」

「そうなのでしょね、でも…」

「もう一つおかしなことがあるのよ、直子、あの人の名前何て言った」

「刈谷さん、刈谷美弥子です」

「それがね、本名は鈴木安江」

「ええっ！じゃあ…」

「そう、偽名で通っていたのね、警察もそのあたりはきちんと調べてるわ、彼女両親を失って、しばらく叔母の家にいたらしいけど、成人してからは一人アパートで暮らしていた」

「夕子先輩、それって、どう言うことなのでしょう？」

「わからないわ、特に問題は、彼女が飲んだカプセルね、一つのはずが二つだった…」

「私はあの子を殺してしまった…本当に殺してしまったのだ…」

「ねえ喬一、何か分かった？」

「毒物はあの花屋の女性、深沢が言ったものに間違いがない、これは検死ではつきりしている、ポケットにあったものは異常なし、普通の精神安定剤だ、すぐロシアンルーレットの中身全てを調べるべきだったんだが、捜査担当者は、

被害者がカプセルを二個持っていたとは思わなかったんだな」

「今から調べられないの？」

「それは難しい、もう決着済みの事件だからな、よほどの新事実でも出ない限りむし返すことはできないのだが：実は早川に頼んでこっそりやってもらった、これは内緒だぞ」

「やるわね喬一、それで？」

「毒入りは残っていた、被害者の飲んだのはルーレットのものじゃあないんだ」

「やはりね」

「被害者が倒れた時にいっしょにいた大学生にも会った、これもこっそりだ、捜査の担当者には悪いからな、喫茶店に入るとすぐに彼女はトイレに立ったという、この時飲んだのだろう、二人で話していて十分程度経ったとき突然机にうつぶせになったそうだ、驚いて救急車を呼んだ、警察

を呼んだのは、これはだめだと判断した救急隊員だ」

「で、その学生との仲は何だったの」

「知り合ってからまだ二回目のデートだったと言う、学生の方から申し込んだのだそうだが、緊張が激しいと言う被害者が精神安定剤を飲もうとしたのはまあ無理が無い」

「そう、だとするとその学生は白ね」

「怪しいのは深沢のパトロンだと言う山畑英一だ、深沢はかなりの不動産を持っている、花屋の土地だけでもかなりのものだ、ところが彼女は自殺志願の上に身体も弱い、そこで自分の死後不動産は彼に譲るという約束をしていた、問題は死んだのが深沢でなく美弥子という子だったことだが、深沢は美弥子をわが子のように可愛がり、それから自殺する気も無くなっていた」

「そこで財産は山畑でなくて美弥子の方へって言うことね」

「それだ、それしか美弥子が殺される理由が無い」

「私もね、そのあたりじゃないかとは思ったの、でもまだ疑問が残るのね、美弥子って子、本名は鈴木安江でしよう、どうして刈谷美弥子なんて偽名を使ってたの？」

「うーんそうだな、彼女、初めから財産を狙って花屋に近づいた：しかしそれでも偽名を使う必要はないか：」

「あつ先輩、それに宇野さん、やはりここにいらしたのですね」

「どうしたの直子？」

「深沢さん退院されました、それをお知らせしようと思つて」

「えっ、直子に知らせて来たの？」

「いいえ、学校の帰りに病院に寄ったのです、でも午前中に退院されたと：」

「それ、少し早すぎない？」

「お医者さまも早いと言ったそうです、でもどうしてもと

いうことだったと、看護士さんが言っていました」

「ふうん：あつ！そうだったの、しまった！喬一、すぐ行きましよう！」

「どこへ？」

「あの花屋よ！急いで！」

「応答ありませんね、燈も消えてるし」

「喬一、車の懐中電灯、早く！」

「えっ、夕子先輩、鍵のかかったドアを開けられるのですか」

「そう、ライトを動かさないで」

「おい、家宅侵入だぞ」

「後で逮捕すればいいでしょ、それよりも早く中へ」

「うん、ここにスイッチが」

「あら！新しいお花がいっぱい……」

「直子さがって！遅かったわ……」

「失敗だったわ…もう少し早く気づけば…」

「どういうことだ？」

「待って、順序よく話すわ、直子のお見舞いに付き合ったのは、少し気になることがあったからなの、もちろん直子から頼まれたからなのだけど」

「先輩、何ですかそれ？」

「薬を飲まないで、手首を切ったことよ、農薬をたったカプセル一個分だけ残してたというのは変でしょう、あの薬農家や花屋にとって必要なものよ、深沢さんまだ持っているはずだと思ったの、二度目は飲んだのだから、事実持ってたのね、でも前も薬を使ったら絶対に助かってなかった…」

「うん？じゃあ死ぬ気はなかったということか？」

「そうでもないの、ただすぐ死ぬことには決断ができなかった…」

「どうして？」

「彼女の娘さんのことよ、娘さんのことが心配だったのね、やはり死ぬ前に一度は会いたかったのだと思う、ロシアンルーレットなんて変なことをしたのもそれじゃあないかしら」

「しかし今度は本当に薬を飲んでしまったじゃないか」

「それよ、私がもう少し早く気づいてたら…彼女病院であれこれ考えているうちに気づいたのね…」

「それだよ、何のことだ？」

「そうですよ先輩、何に気づかれたのですか？」

「刈谷美弥子、逆さに読んでみて」

「こみやりか、です」

「やは二つだから一つ取るの、最初の方ね」

「こみやりか」

「小宮里香、小宮は深沢さんが結婚した後の姓、深沢と言う旧姓に戻してたのだけど、娘さんにとってはお父さんの

姓よ、里香はそのお父さんと深沢さんが二人でつけた名前」

「えっ！」

「な、何！じゃあ！」

「そう、刈谷美弥子、戸籍では鈴木安江は深沢さんの本当の娘……」

「何てことだ！しかし……」

「小宮里香の名前や深沢さんのことは、きつと両親を失った後彼女が住んでいたところの叔母が話したのだと思う、そこで彼女は本当の母に会いにいった、事実を話さなかったのは、育ててくれた両親への愛情もあつたのでしよう、鈴木では深沢さんが知ってるかも分からない、そこで彼女は小宮里香を逆さにして刈谷美弥子と名乗った」

「鈴木安江が鈴木夫婦の本当の子でないことは、被害者の身元確認でわかってたのだが、まさか……ところで夕子、美弥子を殺した犯人は誰なんだ、やはり山畑か？」

「実の母、深沢美智子」

「何！」

「先輩…なぜですか？」

「誤って飲んでしまった事故ね、あれが間違ってるわけじゃないの、深沢さん、最近になってもう一つ毒入りカプセルをつくった」

「…」

「狙いは美弥子でなくて山畑英一」

「なぜ？」

「山畑英一が美弥子に手を出した、想像だけど、言うことをきかなければ花屋の援助を止めるとか深沢さんの秘密をばらすとか、あること無いことを言って美弥子を脅したんじゃないかしら、美弥子にとっては実の母を…」

「うん」

「深沢さん、カプセルを胃薬だとも言って渡したんじゃない、それを見つけた美弥子が『これ精神安定剤よ』『な

んだ、美智子間違えたのか、ならそれ君にやるよ』と、このあたり山畑を問い詰めれば分かることだけど、今ではもう無意味ね…」

「いかがでしょう、先輩？」

「そうね、良く書けてるわ、でも直子が書いたのだから探偵役は直子にすればいいじゃない、これ今度のクラブ誌の原稿？」

「それもあるんですけど、演劇に詳しい友達に頼んで劇の台本にしてもらうつもりなのです、だから探偵は先輩でない」と

「??、で、どう言うこと？」

「ミス妍ミステリー劇場です。深沢役は会長の藤本先輩、後はこのまま」

「はあ？」

特別出演 T大のマドンナ 永井夕子

特別友情出演 現役警部 宇野喬一

「これなら観客動員数、演劇研究会に勝てますよ、こんどの大学祭、ミス妍の催し物これで決定です」

「おい直子君、友情出演とはなんだい？そもそも誰に対する友情だ？」

「あら、私にです、宇野さん夕子先輩の頼みならなんでもきくのに、私のお願いはだめですか？直子泣きたくなってきました」

「おいおい待てよ」

「喬一、心配しなくてもいいの、ねえ直子、会長と私と直子の三人はいいとして、後のメンバーは？これで他のメンバー黙ってると思う？」

「あっそうでした、その他大勢がいるのですね、みんなカプセル飲んで死んだことにしましょうか…」

おわりに

「苦しまぎれ」ってこのことですね、「いいかげんにしろ！」ですか、ごめんなさい。

ところで「幽霊シリーズ」第二十四冊目、「幽霊恋文」が出るそうです。「ばんざい！」



ここに登場する人名は全て架空のもので、万一同名の方がいても、なんら関係はありません。

鷹作幽霊劇場

<http://p.booklog.jp/book/76340>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76340>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76340>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ